

「腐卵」

内田まる

あらずじ

内海うい（21）は都内私立の文系女子大生。家族とは不仲で、ガールズバーで働きながら生活費・学費を捻出している。ルッキズム・消費社会・貧困……生きづらさの中、ういは複数の偽名を使うことでその重圧に耐えていた。そんなある日、ういは痴漢を突き飛ばし、事故を起こしてしまう。混乱し、交差点に飛び出すういの手を引いたのは、どこかで出会ったことがある……けれども名前以外は何も思い出せない、【ヨシカワ】という男だった。

その後、事件動画がSNSにアップされ炎上。ういは悪夢を見るようになる。周りに合わせ、世間の常識に従っていたういは「何が善くて、何が悪いのか」という軸を見失ってしまう。就活も全くうまくいかず、ういは自身の存在意義に疑問を持つようになる。ういはそれ以降「周りの目」が異常に気になるようになり、ひとまず【ヨシカワ】に匿ってもらうこととなる。

【ヨシカワ】は趣味も合う上に、求める言葉を与えてくれる。事件については「正当防衛」だと言い、就活がうまくいかなくても「ういは特別」だと擁護する。何かの知り合いではないかと勘繰るも、やはりどこか怪しい。ういは【ヨシカワ】との交流を通して、元より興味があった「文を書くこと」に挑戦しようかと悩み始める。精神不安定なういに、【ヨシカワ】は「つらい時に飲むといい」と言って「おまもりの薬」をくれる。

覚悟を決めて就活を辞めるうい。人の目に囚われることから解放されようと、全てのSNSを削除し、連絡先の男性も全員ブロックする。

一方【ヨシカワ】は、うい不在の際、自分の部屋（404号室）の隣部屋（403号室）へ頻繁に顔を出す。403号室には【ヨシカワ】と全く同じ顔の双子が住んでいる。403号室の住人が本物の「ヨシカワ（芳川翔平）」であり、404号室の【ヨシカ

ワ】は、実は弟の「清水龍平」だった。龍平は母親に捨てられ里親の元で育ち、「兄（翔平）になりたい」という願望を持っている。また、翔平とういは恋人同士だったが、激しい衝突の末破局。ういは統合失調症発症の後、無意識下で翔平のストーカーとなっていた。

ういは引き続き「周りの視線」に思い悩み、【ヨシカワ】（龍平）にもらった薬に手をだすも、ストレスは加速していく。【ヨシカワ】（龍平）に相談すると、「ストレス発散」のために10月31日に渋谷でデートすることになる。

ういは体調を崩しがちになり、【ヨシカワ】（龍平）の家に籠り「おまもりの菓」を飲む日々を過ごす。文を書こうとするも、うまくいかない。そんなある日、龍平がわざと置いていた「ういと翔平の共同制作映画」を、そうとは知らずに再生してしまう。エンドロールに映る「監督・芳川翔平」の文字を見て、【ヨシカワ】（龍平）に盗作されたと思い込み狂乱するうい。【ヨシカワ】（龍平）へ明確な殺意を抱く。ういの不安定な精神状態はより加速し、夢と現実が曖昧になってくる。

10月31日、ういは【ヨシカワ】（龍平）の殺害を決意。映画撮影で使った「お面」を着用し、割った鏡の破片を片手に渋谷へ向かう。錯乱したういは、街ゆく男性たちが【ヨシカワ】に見え、次から次へと傷つけていく。ついに追い詰めた【ヨシカワ】を鏡の破片で突き刺すが、それは自分自身であった。龍平は、兄への執着から「ういに翔平を殺させよう」と画策していたが、失敗に終わる。

病室で目覚めるうい。夢と現実が混じりあっていく中で、ガラスの破片で顔をぐちゃぐちゃにする。社会の重圧からも、人の視線からも解放されたういは、病室から窓の外へと逃走していく。

人物関係図

● 内海うい（うつみうい）（21）

・都内私立大学文学部3年。就活生。ガールズバー勤務。内気でサブカルのミーハー。自己肯定感が低い。SNS中毒の性依存症で男性嫌い。文を書くのが好き。何者かになりたい「普通」の人間。
・一見、愛想良く相手に合わせているが、人に心を開かない。誰も私の本当の心なんて分らないと思っている。

・内海家は、父の不倫のせいで仮面夫婦。母が過干渉なため大学進学を機に家出。ほぼ縁を切っている。

・芳川翔平の元彼女・現ストーカー。統合失調症気味で昔の記憶が抜け落ちている。無意識に毎日翔平へ手紙を書いて出している。

● 清水龍平（シミズリュウヘイ）（26）

・翔平の双子（一卵性）の弟。フリーター（運び屋）。中卒。

・ソシオパス（反社会性パーソナリティ障害）。幼少期から他者への共感性に欠け、暴力的。母からネグレクト・虐待されていた。

・小学低学年のころ児童相談所に一時保護され、里親の清水家へ送られた。元母に気に入られたくて「翔平」になりたいと強く願うようになる。元母が大好き。

● 芳川翔平（ヨシカワシヨウヘイ）（26）

・龍平の双子（一卵性）の兄。現在は躁鬱・PTSDを患い、ひきこもり。元カメラマン（映像）。趣味は映画制作。ういの元恋人。
・性依存・ヒステリック・過干渉で中身のない母が大嫌い。

● 芳川瑞穂（48）

・龍平・翔平の母。芸能一家の娘で元モデル。大御所と不倫し双子を妊娠、芸能界引退。翔平に芸能界デビューしてほしい。

● 内海千佳子（48）

・ういの母。専業主婦。夫の不倫発覚後、ういに依存している。

令和4年9月末。都内。

○駅前のATM

内海うい（21）、大学の後期授業料（25万程）を入金している。残高は1万円ほど。

うい 「……（ため息）。」

うい、知らない番号から電話がかかってくるも切る。

LINEを開き、【ガルバ②（吉祥寺 Alice）】に電話をかける。

うい 「……もしもし。ユウです。あの、今月のシフト増やしたいんですけど……。あ、はい……ちよつと、アレな人にも声かけて大丈夫ですか？」

○電車内(夜)

うい、渋谷に向かっている。電車内の広告は、脱毛・整形・ダイエット・資産運用……。車両の端では酔っ払いの男が女に絡んでいる。うい、それを横目で見るも、無視。うい、座ってSPI対策の教本と手帳を広げているが、手元ではマッチングアプリをしている。企業から、採用お見送りの旨が記載されたお祈りメールが届く。

うい 「……。」

うい、【内海うい】名義で畏まったテンプレ通りの返信。

【koki (tinder・塩顔)】から、「うみちゃん(こいこ)今日」

というLINEメッセージが、飲食店のURLと共に送られてくる。うい、「ありがと！ おいしそー。たのしみ！」と返す。

うい、同時並行で、【高橋 (Alice 客・出版)】に「高橋さん〜！ お久しぶりです〜！ 今月末とかって来れたりしますか〜？ そろそろ会いたいな〜」と送る。

うい 「(息を吐いて) ……。」

歌を歌っている中年女性、乗車してくる。

女性、ういの向かいに座り、窓の外を眺めながらしきりに独り言を呟いている。女性の周りだけ人がいなくなる。

うい、それを眺めたあと、Twitterを開く。【内海うい】、

【um】(鍵アアカウント)、【現(うつつ)】、【劣生】(鍵アアカウント、フォローフォロー)など、幾つものアカウントを持っている。

うい、【劣生】のアカウントを開く。「歌歌ってるおばさんいる。別の世界から乗車してきた？」と打ちこむも、投稿せずにケータイを閉じ、手帳を開く。カレンダーのページには、就職面接の予定と男の名前がぎっちり。後ろのメモページを開くと、日々の夢日記や感じたことが書かれてある。

うい、メモページに【夜のガラスは鏡みたい】と追記。人がたくさん乗車してくる。

うい、深呼吸をしたあと、薬(抗不安薬)を飲んでから目を閉じる。

渋谷駅前。年配の男と手を繋いでいる若い女、コンカフェ・地下ドルのビラ配り、地べたでストロング缶を飲む大学生……。

うい、はだけた服でホテル街から飛び出してくる。フラフラしながら道玄坂を下る。

ケータイを開くと、ラインの通知が来ている。【koki (finder・塩顔)】から大量の不在着信、「出るブス」など暴言のメッセージ。他メッセージをスクロールするも、アプリの男、ガールズバーの客、母親からの大量の長文メッセージ（未読）、公式ラインくらいしか履歴にない。母のメッセージは、「元気にしてる?」から始まり、「優生もお母さんのこと裏切るの?」「お父さんみたいに絶対なつちや駄目」「早く実家に帰ってきて」など。うい、ぶつかりざま知らない男に胸を揉まれる。

うい 「っ!?!」

うい、男を突き飛ばす。男は車道に出てしまい、車に轢かれる。辺りは騒然。

うい 「え、あ……あ……。」

うい、スクランブル交差点の赤信号が青に見え、飛び出す。

清水龍平（26）、ういの腕を引つ張る。

龍平 「ういちゃん！ 赤だよ！」

うい 「……………ヨシ、カワ。」

○龍平の部屋・404号室（外観・夜）

古いマンション。龍平の部屋は、404号室。

○龍平の部屋・404号室（屋内・夜）

龍平 「ただいまー。」

龍平、手にはコンビニの袋。

うい、龍平の後ろから付いて入る。

5畳半ほどの部屋には、ローテーブル・ベッド・小さなテレビ・DVDプレーヤー・姿見・床に直置きDVD/パソコンフレット/漫画等。ローテーブルにはたくさんのシールが貼っており、一番大きいのはボロボロなシーラカンスのシール。

うい 「……本当にここに住んでるの?」

龍平 「……なんでー?」

うい 「ないから。生活必需品が。」

龍平 「あはは。最近越してきたからねー。」

うい、床にある能のお面のようなものを見つけ、見つめる。

うい 「……学校とかいつてる? ちゃんと。」

龍平 「ういちゃんひどい。シャカイジンだよ、いちおー。忘れたのー?」

うい 「……そうだったっけ?」

うい、片手間でケータイを開き、連絡先の「や行」の欄

を見返している。「ヨシカワ」の文字はない。

龍平 「ね。いーからさ。(ういからケータイを奪い)何か観よ？
また文句でもいーながらさ。ねーどれがいい？」

龍平、やや乱雑にDVDをいくつかういに手渡す。
それは、全て見覚えのあるもの。

うい 「(目見開き、笑って)……全部最悪。」
龍平 「とか言って、最後まで観るくせにー。」

○同(夜)

うい、龍平、寄り添って映画を観ている。ローテーブルには、空になった缶チューハイ。

うい 「……ねえ。」

龍平 「なにー？」

うい 「……捕まるのかな。」

龍平 「(テレビ指差し)この人？」

うい 「私。……今日、人殺したのかな。」

龍平 「ええ？ あはっ。嘘でしょー？ おおげさー。」

うい 「大袈裟じゃないよ。」

龍平 「おれ見てたよー。あれはセイトーボウエーだよ。」

龍平、ういの肩を抱く。

うい、龍平の肩にもたれる。顔が近づき目と目が合う。

龍平の目には、ただ自分が映っている。

うい 「(見つめて) ……。」

龍平 「んー？」

龍平、ういの首筋にキスをし、強めに噛む。

うい 「っ」

龍平、ういをゆっくりと押し倒しながら、ういの服に手をかける。

うい、龍平の手が胸に触れ、反射的に身体が強張る。

うい 「……………」

龍平 「？ どした？」

うい 「……………本当にそう思ってる？」

龍平 「んー？ なにがー？」

うい 「だから、正……………」

龍平、ういの唇を塞ぐ。

龍平、行為を続ける。シャツを脱ぐ。背中には古い傷跡がある。

龍平 「ね。誰とでもこういうことするっ？」

うい、手首を押さえられている。龍平の手を振り払おうとするも、到底敵わない。姿見に映る、龍平に組み敷かれた自分の姿を見て、軽く笑う。

うい 「……………分からない。覚えてない。」

龍平 「……【ヨシカワくんだけですー】って言うんじゃない？
こーいうときってフツー。」

龍平、ういの首を絞める。

龍平 「会えてうれしいよー、おれ。ういちゃんの書く文、だー
いすきだからさー。」

うい、意識が遠のく。

○夢・知らない部屋（屋内）

うい、いつの間にか一人。

何者かに、窓を外からドンドンと叩かれている。窓の外
遠くからは祭囃子が聞こえる。

うい、ゆっくりと窓際の人影に近づく。

祭囃子がだんだんと大きくなる。喘ぎ声の録音のような
ものが混じって聞こえます。

ヨシカワ 「入れてはいけない。」

うい 「え？（振り返り）」

○夢・道（屋外）

そこは、祭りの人混みに切り替わる。

幼いうい（7）、道の真ん中で泣いている。

祭囃子に紛れ、喘ぎ声がどんどんと激しくなる。

幼いうい、お神輿が通る道路の向かいに、父親が知らない若い女と歩いているのを見る。

幼いうい「お父さん！」

若い女がこちらを向く。それは、夜職の自分。

うい（21）、ハッとして幼いういの目を隠す。

○夢・うい実家（屋内）

そこは薄暗い寝室に変わる。

幼いうい、母の震える手で目を塞がれている。

母 「見ちゃ駄目。目が腐る。」

性行為の音が響いている。

録画の巻戻し音と共に、今のシーン自体が巻戻される。

○夢・白い部屋（屋内）

誰かに動画を止められる。

見上げると、真っ青な液体に濡れた龍平がいる。

うい、龍平と性行為をしている。

龍平 「ねえ！ おとーさん、一緒に殺しちゃえばいいじゃん！」

龍平、笑う。

部屋が、どんとんと水で満たされていく。

○龍平の部屋・404号室（屋内・夜）

うい、飛び起きる。

龍平、部屋の隅でタバコを吸いながら、誰かに電話をかけている。

テーブルの上には、ういの財布やケータイ、身分証が散らばっている。身分証の名前欄は、「内海うい」表記。

うい 「(テーブルを見つめ) ……。」

龍平、繋がらない電話を切り、タバコを消してチューハイの缶に捨てる。

龍平 「(ういに気づき) ……おはよー。」

うい 「……。」

龍平 「……優れるに生きるで“うい”じゃなかったっけ？」

うい 「……変えたの。嫌いだから。」

○オフィス (外観)

都内、洗練された高層ビルが立ち並ぶ。忙しなく行きかうサラリーマンたち。

○オフィス・会議室 (屋内)

うい、就職面接に来ている。男性の面接官3人と向かい合っている。

面接官1 「履歴書を見て) ……これ本当？」

うい 「……それは、どういった……。」

面接官1 「学生時代に力を入れたこと」。

バイトで売上を3倍に
よって。詳細教えてもらえる？」

うい、面接官と目が合い、固まる。

うい 「あ……その……（手帳を開き）。」

面接官1 「あーあーあー。ええ、カンペ？」

うい 「……………わ、たしは学生時代、……………」

面接官2 「履歴書持ち上げて）これをそのまま読み上げようとしてますか？ もしかして。」

うい 「……………あ、……………いや……………」

面接官2 「……………こちらでも貴重な時間を割いて面接しているわけですから。書いてあることをそのまま言われても。読めば、良いわけだから。それは。」

うい 「……………すみません。」

面接官1 「（ため息）ネットのテンプレそのままでしょー？ これ。学生時代何してたの一体。」

うい 「……………」

面接官3 「……………あー、いったん、そうですね。（履歴書持ち上げ）これからは離れて。……………何か、PRとかってあったりしますか？」

うい、面接官の目を直視できず、俯く。手のひらを強く握りしめる。やや呼吸が荒い。

面接官3 「……………そうですね。えーっと。他の人にはないような？」

内海さんだけの素敵な強みがあれば、聞かせてください。」

うい、口を開けるも、面接官と目が合うと、やはりうまく息が吸えない。

面接官1、大袈裟に息を吐く。

面接官2、書類をまとめだしている。

面接官1 「モゴモゴしても分かんないよー。もっと声出して、

はつきり。相手に伝わらないと意味ないんだから。」

うい 「あ……。」

面接官1 「はー。きみ大学生だよね？ どうせ遊んでばっかなんでしょ。ダメだよ、真面目に勉強しなきゃ。」

面接官3 「ぶ、部長……。」

うい 「……。」

面接官3 「そ、う、ですねー。……内海さんも、就活の姿勢については、今一度じっくり考える時間があると良いかもしれませんね。本気でやれば、楽になりますよ。後々。」

面接官2 「(息吐き) 結果は2週間以内にメールでお知らせします。」

○電車内(夜)

うい、手帳を開き、フリースペースに「反省点」と書く。

うい 「(進まず)……。」

うい、ペンをおき、深呼吸。ケータイを取り出し、Twitterを開く。タイムラインでは、渋谷での事故動画が拡散されている。

うい 「えっ。」

うい、リプライや引用リツイートを1つ1つ確認していく。【痴漢は死刑】、【これはやりすぎ】、【生きてんの?】、【命に別状はないらしい】…等々、賛否両論のリプライ欄。

うい 「っ……（周りを見渡し）」

うい、周りの人が自分を見つめているように見える。

そのとき、知らない番号から着信が来る。乱暴に切る。

うい、もう一度手帳を開き、反省点の続きを書こうとする
もできず、ペンでぐちゃぐちゃにする。

うい、手帳のメモページを開き、震える手で【悪は、
善???】と文字を書き殴る。

隣の男、眠ったふりをしてういにもたれかかる。

うい 「っ……!!」

うい、息苦しくなりピルケースを取り出すも、薬が切れ
ている。手が震える。

電車が駅に停車し、うい、ハッと顔を上げる。

目の前のガラスに、リクルートスーツ姿で何も抵抗でき
ない自分の姿が映っている。

うい 「~~~~!!」

そのとき、【ヨシカワ（知り合い?）】（龍平）から「な
にしてる〜」と連絡がくる。

うい、急いで降車。駅構内の椅子に腰掛け、【ヨシカワ
（知り合い?）】（龍平）に「いつときかくまって」と返
信する。

○龍平の部屋・404号室（屋内・夜）

事後。うい、映画を眺めている。

ベッド付近には、露出の多い服が脱ぎ捨てられている。

龍平、部屋の端でタバコを吸いながら電話をかけている。

龍平 「(電話切って) ……んー。」

龍平、ういの元に戻ってくる。そのとき、服が足に引っかかる。

龍平 「……(服持ち上げ) なんかフィンキ違うよねー、今日。」

うい 「雰囲気ね。」

龍平 「んあーい。」

うい 「(映画眺めながら) ……こういうのが好きだと思ったから。」

龍平 「え?」

うい 「……頭悪そうなのが好きだと思ったから。」

龍平 「……(呟いて) きしょ。」

うい 「?」

龍平、タバコをもみ消す。

龍平 「あ! そーうだ! (ういの隣に来て) あれ見たー?

ういちゃんめっちゃバズってたやつ。」

うい 「……。」

龍平 「もーユーメイジンだよー! すごいよー!」

うい 「別に、顔は映ってないから……。 (ため息) ……こんな
の特定でもされたら就活が……というか、もう人生が終わりだし。

この先一生、見られて、見られて、見られる生活が……。」

龍平、爆笑。

龍平 「ういちゃん！ 大丈夫だよー！」

うい 「っ、なにを根拠に……」

龍平、ういの肩を掴む。

うい、一瞬強張る。

龍平 「ういちゃんはー、才能があつてー、文書くのがとっても

上手でー。周りがそれに気づいてないだけ。」

うい 「……。」

龍平 「ういちゃんは、トクベツだから。」

龍平、袋に入った菓をういに手渡す。

うい 「(菓見つめて)……。」

龍平 「おまもりあげる。辛いときに飲んだらいいよ。」

うい、龍平の瞳を見つめる。そこには自分が反射しているだけ。

うい 「……ヨシカワ、人じゃないみたい。私の反応で言葉を選んでる。引き出しから最適な言葉を。」

龍平 「(笑つて) こういうときはフツー【ありがとう】だよー?」

○大学(外観)

都内私立大学。生徒がまばらに登校している。

○同大学・図書館（屋内）

うい、履歴書や会社説明のパンフレットを全てシュレッツダーにかけている。

うい 「(息を吐き) ……。」

うい、アプリの男やガールズバーの客・店長などの連絡先を消していく。

うい、Twitterを開く。タイムラインでは、渋谷の事故動画が未だ炎上している。小規模ではあるが、【#痴漢は死罪】と言ったフェミニズムムーブメントのようなものが起きている。

うい、1つずつ自分のアカウントを消していく。そのとき、創作アカウントの【現(うつつ)】の投稿が少し伸びていることに気付く。

うい 「……。」

うい、【現(うつつ)】のアカウントも削除する。

○夢・熱帯魚店のような場所（屋内）

うい、何かに追いかけられ、一本道をずっと走っている。左右の水槽には、金魚や熱帯魚が泳いでいる。行き止まりの扉がなかなか開かない。

うい、扉を壊して無理やり開けると、そこから腐ったシーラカンスが流れ出てくる。

うい 「わっ!」

シーラカンスの目には、ういではなくヨシカワが映る。

ヨシカワ 「本物じゃない。」

うい 「え?」

ヨシカワ 「お前から見た俺は、お前だから、本物じゃない。」

○龍平の部屋・404号室（屋内・夜）

龍平、電話をかけているが繋がらない。

龍平、ケータイの画面を眺める。そこには、【母さん】
という表示。

龍平 「……（電話切って）やっぱ繋がんないなあー。」

龍平、部屋を出る。

○龍平の部屋・404号室（外観・夜）

龍平、404号室から出てきて、隣の403号室のポストを開ける。中には大量の郵便物。

龍平、それらを全て回収し、403号室へ入る。

龍平 「おーい。生きてるー?」

○大学・講義室（屋内）

講義中。

教授 「……みさーん……内海さーん。」

うい 「(目覚め)っ！」

教授 「寝てたら、欠席になりますからねー。」

うい 「……みません……。」

うい、他の生徒が全員自分を見ているように見える。息
苦しくなる。

うい 「……っ。」

うい、ピルケースを取り出すも、いつもの薬は切れてい
る。

龍平がくれた薬を取り出し、飲む。残りの薬をピルケー
スに移す。

○道(屋外・夜)

ひと気の少ない帰り道。

うい、道中で、女子高生を尾ける男を発見する。

うい 「……。」

うい、2人の後を尾行する。どこまで行っても、男は女
子高生から離れない。

うい、110番の準備をする。

女子高生、踏切を待っている。男、一定の距離を空けて
後ろにいる。

男、バッグからカッターを取り出す。

うい 「！」

うい、男からカッターを取り上げる。

女子高生「(振り向き) えっ？」

うい、男と揉み合いとなり、男をカッターで傷つけてしま
まう。

うい 「……通報しますよ。」

男 「……ッ。」

男、逃亡。

女子大生「あ……。」

女子高生、震えている。

うい、寄り添う。

うい 「……大丈夫？」

うい、警察に電話をかける。

女子高生 「……す、ストーカーです、あの人。私の。」

○翔平の部屋・403号室(屋内・夜)

部屋の中は、足の踏み場がないほどゴミで溢れている。

龍平 「げー。ばっちー。すーぐ汚くなるねー。」

芳川翔平（26）、布団に潜っている。

翔平 「……。」

龍平、布団の近くに座り、郵便物を分別する。

龍平 「ねーねー。電話繋がるー？ 母さんと。 おれチャツキ

ヨされてんのかなー。」

翔平 「……。」

龍平 「（仕分け終わり）はいどーぞ。 ……おきてるっ。」

龍平、布団を捲る。そこには龍平と全く同じ顔の翔平がいる。

翔平 「……勝手に入ってくんな。」

龍平 「ひとりじゃなんにもできないくせに。」

翔平 「しね。」

○交番前（屋外・夜）

うい、女子高生、交番から出てくる。

女子高生 「あのっ……ありがとうございます、本当に……。」

うい 「（軽く会釈し）帰り、気をつけてね。」

うい、立ち去ろうとする。

女子高生 「あ、あの！ ……お名前、なんて言うんですか？」

うい 「いや、そんな……。」

女子高生「お姉さん、もしかしてあの動画の人じゃないですか？」

女子高生の目が、ういを見つめる。

うい、通行人全員が、自分を見ているように見える。

うい「……………」

うい、走って逃げる。

○翔平の部屋・403号室（屋内・夜）

翔平、大量の手紙を乱雑に破っている。

龍平「もったいない。ラブレターなのに。」

翔平「呪いの手紙だろうが。どう見ても……………」

手紙の送り主は全て「内海優生」。翔平の前の住所から転送され届いている。

龍平、1通の手紙を開けて見る。ういの手帳のメモペー
ジが、2つ折りにされ入っている。

龍平「えー。でも、てーねーにいーっぱい文字書いてあるよー？
…………宇宙語みたいだけど。」

翔平「アレは頭おかしいんだよ…………！ 人間じゃねえよ、も
う。」

龍平、笑いながら、周辺を片付ける。

龍平「なーにそれー。もー。ソレと付き合ってた誰かさーん。」

翔平 「っ！」

翔平、ペットボトルを龍平に投げる。

龍平 「いてっ。ショーガイザイでタイホ、タイホ。」

翔平 「……それはお前だろ。」

龍平 「えー？ 違うよー。グハンショーネン？ で連れてかれたんだよー。……だよね？」

翔平 「知るか。」

龍平、ういから【近くの店入ってる】と連絡がくる。

龍平 「あっ。やばやば。」

龍平、ゴミをまとめる。破かれた手紙を見つめる。

龍平 「……一緒にえーがまで作ってたのにね。おかしーねー。にーちゃん。」

翔平 「……またそう呼んだら殺すからな。俺とお前は家族じゃない。」

龍平 「？ でも同じ遺伝子じゃん。」

翔平 「うるせえよ、死ねよ。どっか行けはやく。消えろ俺の前から。おまえもあいつも全員死んじまえ。」

龍平 「はいはい。もー行きまーす。ペットボトルは金曜日ー。」

翔平 「(睨み) ……。」

龍平 「？ ……あ、デートデート、ただの！ 心配したのー？ あはは。あの運ぶシゴトはやめたよ！ イホーだったみたい！」

翔平 「いいから早く行け。」

龍平、手をひらひらさせ出ていく。

翔平 「……ババアにそっくりだよ、お前は。」

翔平のケータイには、「芳川瑞穂」からの大量の不在着信。

○龍平の部屋・404号室（外観・夜）

龍平、403号室から出たあと、片付けのときに盗んだDVDを眺める。それは、翔平の自主制作映画。

龍平 「……あはは。」

龍平、自分の部屋（404号室）のドアポストにDVDを入れてから、その場を去る。

○中華屋（外観・夜）

寂れた中華屋。人通りはない。

○中華屋（屋内・夜）

うい、龍平、向かい合って座っている。

机上には、大量の中華料理。

うい、過食している。

龍平 「すっげー！ 撃退したんだ！ ヒーローじゃん！」

うい 「……。」

龍平 「何その顔―。」

うい、黙って食べ続ける。

龍平 「え、なにになになに。あ、わかった。はい。おれが遅刻したから！ 怒ってたんだ？ え―。ごめん。ごめん―。ごめん―。」

うい、音をたて食器を置く。

龍平 「……こぼれるよ―。」

うい 「バレてた、私だつて。」

龍平 「なにが？」

うい 「動画！ 渋谷の！」

龍平 「……ああー、ね。……え、ソレってダメ？ なんか。」

うい 「私のこと見てる！ みんな！ 学校でも、道端でも、どこでもずっと私を見てる……！！」

龍平 「(笑って) やば。ねー、おれそれ知ってるよ。イシキカジョー？ って言うんだよ。」

うい、手元の皮蛋を龍平の顔に投げつける。

龍平 「……くさーい。」

うい 「自意識過剰って言いたいの？」

龍平 「あ、それだ、それ。さすがー。」

龍平、投げつけられた皮蛋を食べる。

うい、手元に残っている皮蛋を握り潰す。

うい 「もうおかしい、最近。胸のところがこう、ザワザワして、うまく眠れない。寝ても覚めてもずっと悪夢みたい。……きえた
い。」

龍平 「へーえ。……あくむってなに？」

うい 「……腐った古代魚が喋るとか！」

龍平 「！ おれ分かるそれ。シ、シ……」

うい 「シーラカンス。」

龍平 「それだ！ シーラカンスだー。あつたまいー。」

うい 「（ため息）……本当に良かったら、こんなことにはなっ
てない。」

うい、手を拭く。

龍平 「はは。でもさ、やりたくてやったんでしょ？ ストリーカ

ー？ 捕まえるのは。」

うい 「捕まえてはない別に。」

龍平 「別に良くない？ 悪いことしたって思ってるの？」

うい 「そうは、思っていないけど……」。

龍平 「じゃ、いいじゃん！ ういちゃん考えすぎー、いっつも。
ストレス溜まってるんだよー。」

うい 「……はーあ。」

龍平、ういの鼻を摘む。

うい 「……や、め、て、ってば。」

うい、顔を振り、龍平の手を振り払う。

龍平 「あはは。……ね、デートしようよ、ういちゃん。今週末。渋ハロー！」

うい 「(鼻で笑って) 付き合ってもないのに?」

龍平 「え?」

うい 「え?」

龍平 「えっ……覚えてないの? 付き合ってたじゃん! 俺たち!」

龍平、笑っている。

龍平 「忘れた?」

○龍平の部屋・404号室(外観・夜)

配達バイクが遠ざかっていく音。龍平の部屋(404号室)のポストから、封筒がはみ出ている。宛名は「シミズリュウヘイ」。

コトン、と封筒がポストに落ちる。

○龍平の部屋・404号室(屋内)

うい、横になって頭を抑えている。一人。

うい 「……」。

うい、立ち上がり、薬を飲む。手帳とペンを取り出し、メモページを開くも、手は進まない。

うい 「……」。

うい、メモページを破って丸め、ペンと共に投げ捨てる。

うい 「……ああ~~~~~……。」

うい、ペンと紙を拾おうと立ち上がる。

そのとき、1つのDVDに目が止まる。それは、翔平の自主制作映画。

うい 「(DVD手に取り)……これ。」

うい、DVDを再生する。

○翔平の部屋・403号室(屋内)

龍平、掃除をしている。

翔平、布団で横になっている。

翔平 「……DVD返せよいい加減。」

龍平 「? なんのことー?」

翔平 「また盗ってんだろ。分かってんだよ、こっちは。」

龍平 「片付けてあげてるんじゃないん。ヒトギキ悪いなー。」

龍平、通知が鳴り、ケータイを開く。

龍平 「……あ! 見て! 1万リツイート! いえーい。」

龍平、渋谷の事件動画を翔平に突きつける。

翔平、それを見て啞然。

翔平 「……………!! (後退り)」

龍平 「あはは。そー。これねー、ういちゃん！」

翔平 「…………お前つ、…………まつ、まじで、何考えてんだよ…………!!」

龍平 「何って…………マネだよ、マネ！ にーちゃんのマネ！ ど

ーがとつてたのー。そしたらー。ほんとぐーぜん。ジケンが！

目の前で！」

翔平 「普通ネットに上げるかよ、気持ち悪い……………!!」

龍平 「えーにーちゃんだつて上げてたじゃん。」

翔平 「それは！ 作品だろ！」

龍平 「一緒じゃない？」

翔平 「……………。」

龍平 「…………にーちゃんさー。こーゆーの見たことある？ 生で。

えーがよりやばかったよ、まじで。」

翔平 「…………病院行けつて本当。」

龍平 「(笑つて) ビョーイン行ったほーがいはにーちゃん

でしょー？ どー見ても。」

翔平 「…………。」

翔平のケータイが鳴る。「芳川瑞穂」からの着信。

翔平、舌打ち。電話を切ろうとするも、龍平に止められる。

翔平 「っ…………おい…………。」

龍平 「(画面見て) ……あー…………いいなあ。」

○龍平の部屋・404号室 (屋内)

うい、食い入るように画面を見つめている。

内容は、「祭りの参列に並んでいる主人公が、【お面を身につけた歌う妖怪】を見つけ、列から離れ追いかけていく」といったショートフィルム。

うい 「……………」。

うい、手帳を手に取り捲る。後ろの方のページで手を止める。

うい、再度テレビ画面を見る。

うい 「……………」。

手元の手帳には、【お祭り】【歌う妖怪】【能面？】妖怪のスケッチなどが書かれてある。

映画の内容と、ほぼ一致。

うい 「……………」。

エンドロールに、【監督：芳川翔平】と出る。

○翔平の部屋・403号室（屋内）

龍平、翔平、翔平のケータイを取り合い揉み合っている。
鳴り止まない電話。

翔平 「…………つ、めろっ…………！」

龍平 「いいなあ。いいなあ。いいなあ。いつつものにーちゃんばつかだ。」

翔平 「なん、の話…………！」

龍平 「ねー覚えてる？ 水族館。1回だけ行ったよね、3人でにーちゃんはずーっと母さんと手繋いでた。でっかいぬいぐるみも買ってもらった。そーだ。おれ、そんとき初めて店からモノとったなあ。おさかなのシール。にーちゃんのぬいぐるみとおんなじやつ。ねえ知ってた？ あれってシーラカンスって言うんだってー！」

翔平 「捨てた！！ 捨てたよ！！ 全部捨てた！！！」

龍平 「なんで捨てたの？ おかしいよ。捨てるならおれにちようだい。」

翔平 「おかしいのはそっちだろ！ つ殺されかけたんだよお前は！ あのキチガイに！」

ケータイが落ち、部屋の端に滑っていく。

龍平 「……。キチガイとか言わないでよ。」

翔平 「あの日のことちゃんと覚えてんのか？」

龍平 「ええ？ ……うーん。」

龍平、シーラカンスのシールの剥離紙を取り出し、そこに書いてある文字を読みだす。

龍平 「……えーっと……シンカイギョ、ゼツメツキグシユ、ラントイセイ？ で子どもを育てる、セイシヨクホーホーはフメイ……」

翔平 「違う！ 同年くらいのがキ叩いたろお前！ それであの女はまたすぐヒステリックになって、お前を打った！ 最後は海に突き落とそうとした！ 最低で最悪な記憶だよ俺にとっちゃー！」

龍平 「……なーんだ。覚えてたんだ。なら、よかったー。」
翔平 「よくねえよ……。忘れられるもんなら忘れてるよ。全部。」

龍平 「そんなん無理でしょ、さすがに。」

翔平 「……分かってんだよ。」

龍平 「……ねー、にーちゃん。」

翔平 「……。」

龍平 「おれたちってさー……シーラカンスなのかなあ？」

龍平のケータイが鳴る。龍平、画面を眺める。

龍平 「……。」

翔平 「……俺と、お前は、違う。」

龍平 「……。」

翔平 「……行け、もう。シミズの家に帰れ。」

龍平 「…………そっかあ。」

龍平、電話を切り、扉を開ける。

龍平 「……あ、そーだ。(振り返り)最後に一個だけ！ イツ
ショーのお願いー！」

○龍平の部屋・404号室(屋内)

うい、龍平に何度も電話をかけている。
頭を掻きむしる。

うい 「な、ん、で、出ないの……!!」

うい、ケータイを投げ捨てる。

うい 「許さない。許さない。許さない。許さない……」

うい、部屋の物を投げたり壊したりする。発狂。

うい 「私のモノなのに！ 私の！！」

うい、部屋を飛び出す。

テレビに映し出されたエンドロールには、「スペシャル
サンクス…内海優生」の文字。

○翔平の部屋・403号室（屋内）

翔平、隣の騒音に気づき、チェーンをつけたまま扉を開
け外の様子を伺う。

そこには、暴れ叫んでいるういがいる。

うい、翔平、目が合う。

翔平 「っうわああ!?!」

うい 「っ」

翔平、大きな物音を立て後退り。

うい、403号室のドアを激しく叩き、支離滅裂なこと
を叫び散らかす。

×××

○翔平過去・道（夜）

うい、こちらを見つめている。

×××

×××

○翔平過去・翔平の前の家（屋外・夜）

うい、扉を激しく叩いている。

×××

×××

○翔平過去・電車内（夜）

うい、向かいの席に座って、こちらを盗撮している。

×××

翔平 「ううう………っ！」

翔平、部屋の端で耳を塞ぎ縮こまる。

○裏路地（夜）

龍平、タバコに火をつける。手にはアタッシュケース。

龍平 「……ういちゃん、もーアレ見たかなー？ ういちゃん、どーにかしてくれるかなあ。」

龍平、ういに集合場所を連絡している。

龍平、吸い終わったタバコを足で揉み消す。

龍平 「……はーあ。はやくにーちゃんになりたーい。」

○夢・知らない部屋（屋内）

うい、部屋に一人。

窓の外にまた人影が見える。

窓も扉もドンドンと叩かれる。祭囃子が聞こえてくる。

うい 「……お前は誰？」

人影 「……」

うい 「私の大切なものを奪ったお前は誰。」

人影 「……て……入れて……」

人影の声は、うい本人の性行為の時の声。

人影 「……入れて……入れてえ……いれ」

うい 「！っ、いやっ……！」

窓が割れ、外から大量の水・魚が流れ込む。うい、飲み込まれる。

足元はいつの間にか崖になっている。

崖、崩れる。うい、崖から暗い海の底へと落ちていく。

もがいても容易に浮上できず、呼吸困難となる。

何者か分からない相手から手を掴まれ、引き上げられる。

○夢・何もない所（屋外）

うい、振り返ると、映画に出てきた【お面を身につけた

妖怪】がいる。

妖怪が、お面を外す。

それは、うい自身。

妖怪 「やれ」

○龍平の部屋・404号室（屋内・夜）

うい、目覚める。手には空になったピルケース。天井のシミが、大量の目に見える。

龍平からの【ここ集合〜!】というLINEメッセージの通知音で、意識が戻る。

うい、ケータイを確認。日付は10月31日。急いで準備を始める。

うい、龍平の用意した安物の仮装（黒猫）を着て、姿見を見つめる。そこには、いかにも頭の悪そうな女の仮装をしたういが立っている。

鏡の中のうい、話しかけてくる。

うい（鏡）「ヨシカワが悪いんじゃないよ。適合できない自分が悪いんじゃないよ?」

うい、姿見を勢いよく倒し、鏡を割る。

そのとき、床に置かれたお面と目が合う。

それは、翔平が映画の撮影で使ったお面。

うい 「……。」

うい、そのお面を着け、一番大きな鏡の破片を持って部屋を飛び出す。

部屋に忘れられたういのケータイが、ずっと鳴っている。

○心療内科(屋内・夜)

電話をかけ続けている医師。諦めて電話を切る。

助手 「内海さん、でないですね。」

医師 「もう来ないかもねー……。 」

助手 「切れてませんでしたっけ？ 薬。」

医師 「うん……。 でも、来ないともどうにもねー。こっちだって全員相手してる暇ないしね。……。忙しいし。」

○電車内〔夜〕

渋谷行き of 電車内、仮装の人々で満員。

龍平、その中で、大きな声で電話している。周りの人に見られている。

龍平 「えー！ 引越すー！？ いつ？ 今！？ なんでまたきゅーに……。今日来るって約束したじゃん！ うそつきー！ 一番大事なやつも返すからさー、DVD！ 渋谷に寄ってよ！ にーちゃん！ お願いーい！」

○渋谷（屋外・夜）

駅前、仮装した若者で溢れている。

うい、人の間を縫うように進む。祭囃子と自分の声が、幻聴として聞こえる。

うい（幻聴）「やれ。やれ。やれ。やれ……。 」

うい、女をナンパしている男とぶつかる。

ナンパ男「つてえ。」

うい、振り返ったナンパ男が、ヨシカワに見える。

うい 「っ……！」

うい、鏡の破片でナンパ男を刺す。流血、周りはパニック。

うい、周りを見渡す。あちらこちらにヨシカワがいるように見える。

うい 「……っ、ああああ……！」

うい、順番にヨシカワを刺していく。血が青に見える。

周りの人間が全員こちらを見ている。

全員、ヨシカワに見える。

うい 「みるな……み、みるな、みるなみるな……！　みるな
っ！」

見境なく周りの人間を傷つけていくうい。

ヨシカワ 「おーい。」

うい 「……っ！」

うい、振り返る。観光案内所の上に、ヨシカワが立っている。

うい 「……………ヨシ、カワ……！」

うい、人をかき分け、観光案内所の上に登り、ヨシカワを追い詰める。

ヨシカワ、笑顔。

うい 「……あやまれ……。」

ヨシカワ「……。」

うい 「あやまれ、わたしに、あやまれ。」

ヨシカワ「……。」

うい 「責任とれよ……わたしの、人生を、めちやくちやにして、すみませんでしたって、土下座してあやまれ。」

ヨシカワ「……。」

うい 「あやまれ!!!!」

うい、ヨシカワを押し倒し、馬乗りになる。

ヨシカワ、無表情。

うい 「……あは。ははは。……ねえ、今どんなきもち？ バカ

で、貧乏で、何の取り柄もないオンナの私に、見下してきた存在に、……こーやって殺されるのって、どんな気分なの？」

ヨシカワ「……。」

うい 「……まー、もうどーでもいいね！ そんなの！ ヨシカワはもう死んじゃうんだから。死んだら、全部、無くなるんだ

から……!!!!」

ヨシカワ「……。」

うい 「…………なんか言っつてよ。」

ヨシカワ「……。」

うい、ヨシカワの顔を触る。

うい 「……ヨシカワの顔見ると、本当よく分かる。自分がど

れだけ醜いのかって、本っ当……よく……！ ……さいあくだよ。
全部、全部、最っ悪……！」

ヨシカワ「……。」

うい 「……でも、それももう終わりだね。」

うい、鏡の破片を振りかざし、ヨシカワの顔を刺す。

若者たち、それをケータイで撮っている。

夜の渋谷に、大量のフラッシュが揺れる。

祭囃子が止み、お面が2つに割れて落ちる。

うい 「え。」

ヨシカワ、ういの見た目が変わる。

ういの見た目をしたソレが、ヨシカワの声で喋る。

? 「うん。サヨウナラ。」

ケータイの録画画面が、スクリーン全体に映る。

ケータイの画面の中のういは、自分の顔に鏡の破片を突き刺している。

龍平、翔平に電話をかけながら、遠目でそれを眺めている。

龍平 「(電話切って) ……あーあ。」

龍平、その場を立ち去る。

遠くから、救急車の音が聞こえる。

○病院・病室（屋内・夜）

うい、目が覚める。頭から顔にかけて、包帯が巻かれている。

うい 「（窓見て） ……。」

うい、おもむろに立ち上がり、窓際へ向かう。

うい 「……。」

ガラスは鏡のように反射し、こちら側を映す。
そこには、幼いうい（7）が映っている。

うい 「……。」

うい、頭をガラスに打ち付ける。

うい 「……しぬ。」

幼いうい 「しなない。」

うい 「しぬ。」

幼いうい 「しなない。」

ガラスに映っていた幼いういの姿が、現在のういに変わる。

うい（鏡） 「死んだら、全部、なくなるよ。」

うい 「……。」

うい、頭を打ちつけるのを止めて、顔を上げる。
ガラスに映ったういの部分が裂けるように割れ、大量の
水が入ってくる。

うい 「っ……………！」

うい、飛び散ったガラス片で頬を切ってしまう。頬を拭
うと、手に赤い血が付着する。

うい 「……………」

うい、水浸しの床から、ガラス片を拾う。
そのガラス片で、顔をぐちゃぐちゃに傷つける。

うい 「っ……………」

割れた窓ガラスには、ぐちゃぐちゃになった現在のうい
が映っている。

うい 「……………（喉に触れ）あー。あー。あー……………はは。」

うい、窓に足をかける。

うい 「はー……………これもう、化粧する必要もないわ（笑）」

うい、破片を地面に投げ捨てる。その破片がこちらに飛
んできて、スクリーン画面自体にヒビが入る。

うい 「(こちらを見ず) ……何見てるの?」

うい、窓から逃走。

窓の外は美しい夜空。秋風で、カーテンが大きく翻る。

了